

## 有機JAS検査員が教える認定取得のここがポイント!!

## ⑥エコファーマーと有機栽培

オーガニック・ランド株式会社 代表取締役 一百野 昌世



## Message

## ■エコファーマー認定制度とは？

最近「エコファーマー」認定を受ける農家が増えています。減農薬栽培がレギュラー品となりつつある昨今、減農薬栽培だけでは差別化が難しくなったからでしょうか。いきなり有機認証取得はなかなか難しいため、その中継ぎ的な役割として、また言葉の響きの良さや目新しさから取得者が増えているのかも知れません。

「エコファーマー認定制度」の根本にあるのは、平成11年施行の「食糧・農業・農村基本法（新農基法）」にあります。新農基法には、農業の持続的な発展を図るには「農業による自然循環機能の維持増進」が不可欠で、農業は国民への食料供給機能と国土や環境の保全機能など多面的な機能を持っており、「環境と調和のとれた持続性の高い農業生産方式による農業生産の推進が必要である」と明記され、各都道府県はこの主旨に準じた農業振興政策を策定しその担い手として「エコファーマー」を認定しています。認定事業者には各種補助金や軽減税制があり認定取得の一考の余地はあると思われます。

## ■環境と調和のとれた持続性の高い農業生産方式の定義は？

## 1)農地の生産力における持続性がある生産方法

堆肥等の活用による農業生産の基盤である農地の土壌の性質に由来する農地の生産力の維持増進（土づくりによる地力アップ）。例えば、土壌の性質を改善する効果が高い堆肥や緑肥作物など有機質資材の施用、化学肥料の施用を減少させる効果が高い局所施肥や肥効調整型肥料（緩効

性肥料や硝酸化抑制剤入り肥料）や有機質肥料の施用など。

## 2)良好な営農環境における持続性がある生産方法

化学的に合成された肥料・農薬の使用を減少させる技術の利用による農業生産に伴う環境負担の低減による良好な営農環境の確保。例えば、機械除草、除草用動物利用（アイガモやコイなど）、生物農薬利用（捕食性寄生性昆虫や拮抗細菌や拮抗糸状菌など）、対抗植物利用、被覆栽培（べたがけや雨よけやトンネルや袋がけ）、フェロモン剤利用、マルチ利用（わらや被覆作物利用も含む）など。

## 3)生産物の量や質における持続性や経済的に持続性がある生産方法

生産物の質や量の従来水準からの大幅な低下を防ぎかつ経営的な合理性を有する生産方法など。

と定められています。つまり都道府県の施策に則って減化学肥料・減農薬栽培を行えば「エコファーマー」になれるのです。Radixの会のメンバーであれば十二分に認定取得可能と思われる。この栽培のその延長線上には無農薬栽培、無化学肥料栽培、有機栽培があり、「エコファーマーの有機認定農産物」という言葉の響きはなかなかいいと思いませんか？地元の農業改良普及所が窓口ですので、詳しくはそちらへ。

## ■有機栽培における有害動植物防除の基本的な考え方

## 1)耕種的防除（通常実行される耕種手段の内容変更による防除方法）

作目および品種の選定（適地適作の作目や品種、抵抗性品種、抵抗性台木の使用、健全種苗の使用、混植・輪作・田畑転換、作期移動によ

る回避）、灌漑、耕起・中耕、被覆植物の利用、その他通常作業で有害動植物の発生を抑制することを意図した計画的な方法など

## 2)物理的防除（物理的性質を利用して防除する方法）

光線の遮断、誘蛾灯・防蛾灯の利用、プラスチックテープ等の反射光の利用、種子の比重選、種子の温湯消毒、土壌の太陽熱または蒸気利用による消毒、爆音等音の利用、電柵など電流の利用、防虫用ネットの利用、粘着トラップ、手取り除草や中耕除草や草刈機利用など人力または機械的な方法など

## 3)生物的防除（生物間の相互作用を利用して防除する方法）

土壌微生物の適正なバランスの保持活性化、病害の原因となる微生物を抑制する拮抗微生物の利用、野鳥やカエルやハチ類などの捕食性及び寄生性天敵の利用、アイガモや鶏やコイによる除草など小動物の利用、香辛植物など臭いなどで忌避する植物の導入、センチュウの拮抗植物であるマリーゴールドや被覆植物（カバークロップ）など有害動植物の発生を抑制する植物の導入、またこれらの生育に適した環境の整備など。

## プロフィール

## 一百野昌世（いおのまさや）

現在登録認定機関6ヶ所の農産物と加工食品の契約検査員として活動する傍ら、認定取得希望者への早期認定取得、許容資材の調査開発、販売斡旋などの総合コンサルティング業務を行なっている。JOIA（日本オーガニック検査員協会）技術委員。